

平城京左京三条一坊一坪の発掘調査（平城第 522 次調査）記者発表資料

2014 年 2 月 26 日

独立行政法人 国立文化財機構

奈良文化財研究所 都城発掘調査部

調査地：奈良市二条大路南三丁目

調査主体：奈良文化財研究所 都城発掘調査部

調査面積：1953 m²（東西 21m×南北 93m）

調査期間：2013 年 12 月 16 日～（現在継続中）

※現地説明会について

今回の調査では、現地説明会はおこなわない

1. 平城京左京三条一坊一坪に関するこれまでの調査

本調査の調査地である平城京左京三条一坊一坪は、平城宮の正門である朱雀門のすぐ南東に位置し、現在は史跡平城京朱雀大路跡に隣接する公園予定地の一部となっている。奈良市教育委員会や奈良文化財研究所による周辺の調査成果によれば、この坪は朱雀大路に面する西面と二条大路に面する北面には築地塀などの遮蔽施設をもたなかったとみられ、朱雀門前の広場的な土地であった可能性が高いとされる。また、奈良市教育委員会の調査により、坪を南北に二分する東西方向の坪内道路の存在が確認されている。

この場所に国土交通省による平城宮跡展示館建設の計画があり、2010 年度から奈良文化財研究所が継続的に発掘調査をおこなっている（平城第 478・486・488・491・495・515 次調査）。これら一連の調査の主な成果は以下のとおりである。

①坪の北端付近に、平城宮造営にともなうとみられる鉄鍛冶工房群が展開していたことを確認した。また、坪の中央やや南よりでそれに付随すると思われる大型の掘立柱建物群を検出した。

②井戸屋形をとまなう上段正方形、下段六角形の井戸枠をもつ大型井戸を検出し、井戸の中からは木簡や木製品・金属製品・土器・瓦など、さまざまな遺物が出土した。なお、この井戸は鉄鍛冶工房群の廃絶後に設置されたものである。

③坪内道路およびその南北両側溝を東西約 44m にわたり検出した。これにより、この坪が

南北にほぼ二分されていたことが確かめられた。なお、この坪内道路は大型建物群廃絶後に敷設されたものである。

④三条条間北小路およびその南北両側溝を東西約 44m にわたり検出した。また、南側溝の南側で足場穴や添柱の柱穴の可能性のある小穴列を検出し、南側溝付近では北側溝付近に比して多くの瓦片が出土することを確認した。これらは一坪南辺には遮蔽施設がなく、二坪北辺にのみ瓦葺きの築地塀が存在したとの想定を支える根拠となり、鉄鍛冶工房群の廃絶以後は井戸や坪内道路以外に顕著な構造物がほとんど確認されない事実とあわせ、この坪が朱雀門前の広場的な空間として利用されていたとの知見を裏づけた。

本調査は、これまでの調査で調査区東方外側へ展開する可能性が想定されていた建物等の確認、および坪の東辺付近における土地利用のあり方の解明などを主な目的として、2013 年 12 月 16 日より開始した。調査面積は 1953 m² である。なお、ここでは 2013 年 5 月におこなった平城第 515 次調査の成果の一部もあわせて発表する。

2. 検出遺構

本調査区内の旧地形は、全体としては北西から南東へ向かって低くなり、さらにその中に小規模な谷があるなど、起伏のある地形である。そのため、平坦面を形成するため広く整地を施している。削平により整地土下の地山が露出している部分もあるが、厚いところでは 30 cm ほどの整地土層が遺存している。遺構はすべてこの整地土上ないし地山面上で検出した。

検出した主な遺構は、以下のとおりである。

建物 1 調査区北東部で検出した桁行 6 間、梁行 2 間以上の南北棟掘立柱建物で、調査区東方外側に展開する。柱間寸法は、桁行が約 3 m（10 尺）等間、梁行が約 3 m（10 尺）。

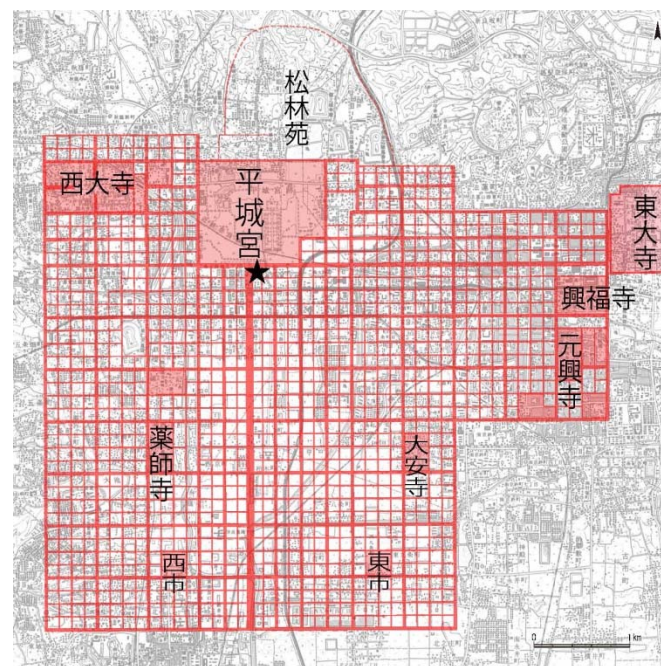
建物 2 調査区北東部で検出した桁行 6 間、梁行 1 間以上の南北棟掘立柱建物。調査区東方外側に展開するとみられるが、塀などである可能性もある。柱間寸法は平均 2.7m ほどで、9 尺等間で設計されている可能性が考えられるものの、やや不揃いである。建物 1 と重複していることから両者は時期を異にするが、先後関係は不明。

建物 3 第 486 次調査で柱穴 5 基を検出していた東西棟掘立柱建物（SB9900）の東延長部分に、新たに柱穴 2 基を検出した。これにより、第 515 次調査で検出した柱穴 2 基とあわせて、建物の桁行規模が 7 間であることが確定した。梁行は 2 間以上。桁行の柱間寸法は平均 2.8m ほどで、9 尺（=約 2.7m）等間で設計されている可能性がある。梁行の柱間寸法は約 2.7m（9 尺）か。

塀 1 第 486 次調査で柱穴 3 基を検出していた東西方向の掘立柱塀（SA9901）の東延長部分に、新たに柱穴 2 基を検出した。これにより、規模が 4 間以上であることが確かめられた。また、調査区北東部で検出した柱穴 1 基も塀 1 の東延長部分である可能性があるが、想定される柱筋からはやや南にずれる。

坪内道路 第 478・488 次調査で検出していた坪内道路（SF9660）。路面は削平され遺存しない。南北両側溝（SD9661・9662）の東延長部分を約 16m にわたり検出した。これにより、検出総長は約 60m となった。北側溝は幅 0.7～1.2m、深さ 15～25 cm。南側溝は幅 0.9～1.5m、深さ 10～25 cm。西から東に向かって排水したものとみられる。両側溝の心の間距離は約 9 m、現状での路面幅は約 8 m。

三条条間北小路 第 478・495・515 次調査で検出していた三条条間北小路（SF9670）。路面は削平され遺



調査地位置図（★印が調査地）

存しない。北側溝（SD9671）の東延長部分を約15mにわたり検出した。これにより、検出総長は約59mとなった。ただし、東端約4m分はこれより新しい流路により南肩が壊されている。幅は0.9～1.5m、深さは15～35cm。西から東へ向かって排水したものとみられる。南側溝（SD9672）は調査区南方外側に存在するものと思われ、東端約4mの部分では第515次調査検出分の北肩がわずかに確認できる。

瓦溜 第478・491次調査で検出していた瓦溜（SX9656）の東延長部分を、東西約4m、南北約4mにわたり検出した。これにより、瓦溜全体の規模が東西約7m、南北約5mであることが確定した。不要となった瓦片を廃棄したものとみられる。

3. 出土遺物

本調査における主な出土遺物は奈良時代の瓦片・土器片である。ただし、調査面積に比して土器片の出土量は少ない。その他に埴輪片なども出土している。

4. まとめ

現時点における主な調査成果は、以下のとおりである。

①新たな建物2棟を検出

調査区北東部で、時期を異にする建物2棟（建物1・2）を新たに検出した。これまでの調査でもこの坪では南半に比して北半に多くの建物や塀などが展開することが指摘されていたが、その傾向が改めて確認された。

②建物3の桁行規模を確定

第486次調査で検出していた建物3（SB9900）の東延長部分を検出したことにより、その桁行（東西）規模が確定した。あわせて、建物3の東側の柱列と建物1の西側の柱列の柱筋が揃うことが判明した。そのため、両者は一連の計画のもとに建設された可能性がある。

③坪内道路および三条条間北小路の東延長部分を検出

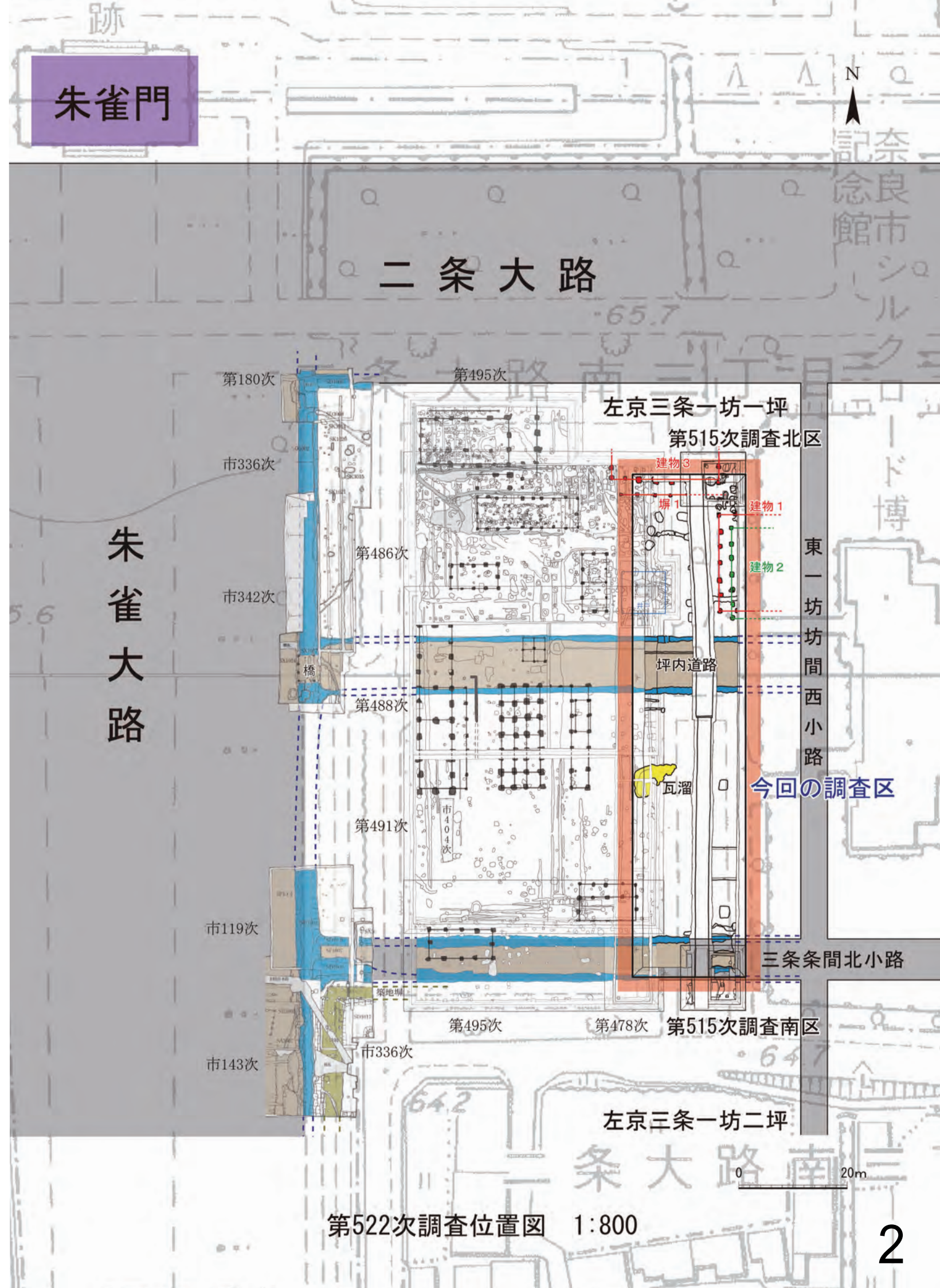
これまでの調査で検出していた坪内道路（SF9660）の東延長部分を検出した。これにより、坪内道路がこの坪の東辺付近まで敷設されていたことが確かめられ、坪を横断していた可能性が高まった。また、三条条間北小路（SF9670）の東延長部分も検出し、平城京の条坊設定に関する新たなデータを得た。

④坪全体の土地利用のあり方を確認

坪内道路と三条条間北小路の間では、建物等の顕著な遺構は確認されなかった。これにより、この坪が鉄鍛冶工房群および大型建物群の廃絶以後、井戸や坪内道路以外には顕著な構造物をほとんどもたない広場的な空間として利用されていたという知見が補強された。

以上は、平城京内における土地利用のあり方とその変遷、左京三条一坊一坪の性格、平城京の条坊設定の様相等を考えるための貴重な成果と言える。なお、今回検出した建物群の建設時期や存続期間等については、今後も調査・研究を継続していく予定である。

本件の問い合わせ先：都城発掘調査部 主任研究員
渡辺 丈彦 (0742-30-6835)





第515次調査北区

建物3

SB9900

塀1

SA9901

建物1

建物2

井戸

北側溝

SD9661

坪内道路

SF9660

南側溝

SD9662

瓦溜

SX9656

北側溝

SD9671

三条条間北小路

SF9670

南側溝

SD9672

東一坊坊間西小路

今回の調査区

第515次調査南区

第522次調査遺構図 1:300

20m

0